鹿の恩がえし

①

むかし　むかし、　播磨の国は　託賀の郡、　賀眉の
里は　杉原谷に、　与平と　与一という　紙すき職人の
親子が　すんでいました。

鹿の恩返し

○ 多可町歴史街道推進協議会委員
宮崎　和明
川口　昭三
藤井　伊都子
藤井　英延
筒井　かつ子
西田　公世
門脇　謙一
佐藤　俊樹
埴岡　真弓（播磨学研究所研究員（コーディネーター））

○ 紙芝居制作協力者
村上　裕介（兵庫教育大学　体育・芸術教育学系准教授）
吉田　侑右（兵庫教育大学　大学院１年次）

○ 紙芝居制作助言者
宮原　文隆（多可町教育委員会・那珂ふれあい館館長）
安平　勝利（多可町教育委員会・那珂ふれあい館課長補佐）

○ 参考文献
『北はりま、丹波昔ばなし百話』風車卸衣料株式会社

鹿の恩返し
2011年3月初版発行　　16場面

発行　多可町
〒679-1192
兵庫県多可郡多可町中区中村町123番地
電話　(0795)32-2380(代)

編集　多可町歴史街道推進協議会

印刷　ヤタベ印刷

②

②

けさも　早くから、　与平・与一親子は　手を　きる
ような　つめたい　川で、　コウゾを　さらして　いま
した。

与一「とうちゃん、　今日も　水が　つめたいなぁ」

与平「この　つめたい　水の　おかげで、　まっしろな
紙が　つくれるんや」

③

と、そこへ　なにやら　バタバタと、　川へ　とびこんで　きたものが　あります。

与一「とうちゃん、鹿や　子鹿や」

与平「けがを　しているようや。　早う　助けて　やらんと」

子鹿は、　足から　血を　ながし、息も　たえだえです。

与平「こらー、この野良犬めがー」

与平は　犬を　おいはらいました。

④

与一は　子鹿を　家に　つれて　かえり、　傷の　手を　当てを　して、　やすませて　やりました。

与一「早く　なおると　いいな。　元気に　なったら、　山に　かえして　やるからな」

⑤

与一は　子鹿を　小太郎と　名づけて　かわいがりました。　子鹿も　与一につき、　一年が　すぎるころには　けがも　すっかり　よくなりました。

与一「小太郎、　元気になったな。　よかった、　よかった」

⑥

とうとう、小太郎を山に かえす 日が やって きました。

与一「二度と あんな目に あうんじゃないぞ、元気で な」

小太郎は、与一を なんども なんども ふりかえりながら、奥山へと かえって いきました。

⑦

それから　しばらくたった　冬の　さむい日、　与一は　奥山へ　紙の材料にする　コウゾを　さがしに　いくことになりました。

与平「与一、あの山は　けわしいから　用心して　いけよ」

与一　「大丈夫やで、　いきなれとる　とこやから」

⑧

与一が　どんどん　山ふかく　はいっていくと、　ふいに　目の前に　鹿が　あらわれました。

よく　みると、　小太郎　そっくりの　鹿です。

与一　「おまえ　小太郎か、　そうやろ。　大きくなったなぁ。　元気そうやし、　ほんまに　よかった、　よかった」

⑨

与一「そうじゃ、　小太郎。　おしえて　くれへんか。
ちかごろ　コウゾが　めっきり　へってしもうて、
とうちゃんも　おれも　こまって　いるんや」
すると、　小太郎は　向きをかえるなり、　スタスタ
と　奥山に　むかって　あるき　はじめました。
まるで　与一の　道案内を　するかの　ようでした。

⑩

与一は、　小太郎の　あとを　おって、　山を　のぼって　いきました。　そこは、　与平が　言ったとおり、

岩だらけの　けわしい　道でした。

与一「小太郎、　この道は　ほんまに　せまくて　きつい　道やな」

そう　言った　とたん、

（さっと抜く）

⑪

与一（よいち）「あーっ」

与一（よいち）は　足（あし）を　すべらせ、まっさかさま、　谷底（たにそこ）へ

ころがり　おちて　しまいました。

⑫

夜に　なっても　与一が　かえって　こないので、村は　おおさわぎに　なりました。

村人たちは、　松明を　片手に、　山へ　与一を　さがしに　いきました。

村人　「与一やー。おーい、与一やー」

村人たちは　あちら　こちら　さがし　まわりました

が、　とうとう　与一は　みつかりませんでした。

⑬

夜が　あけはじめたころ、与一は　自分が何か　あたたかいものに　つつまれて　いることに　きづきました。

目を　あけて　みると、小太郎が　すぐ　そばに　いました。

与一「小太郎、小太郎やないか」

冬の　夜の　さむさから　与一を　まもって　くれたのは、　小太郎　だったのです。

与一「ありがとう、小太郎、ありがとうな」

⑭

小太郎は、　与一の　元気な　すがたを　みとどける
と、　山へ　かえって　いきました。

与一「さよなら、小太郎、ほんまに　ありがとうな」

与一は、　小太郎が　みえなくなるまで　手を　ふりました。

（注）⑮は分割画面
引き抜き注意

⑮

与一が　ふと　まわりの森を　みわたすと、　あたり一面に　コウゾが　おいしげって　いるでは　ありませんか。

（ここで最後まで抜く）

それからと　いうもの　与平・与一親子は　いつも小太郎に　おしえて　もらった　森で　コウゾを　かりとり、　りっぱな　紙を　たくさん　すくことが　できるように　なりました。

ふたりは、　いつまでも　しあわせに　くらした　そうです。

⑯

むかし　与平と与一が　くらした　場所には、　現在

杉原紙研究所が　たっています。

今も　コウゾで　すかれた紙は、　杉原紙として　う

けつがれて　います。

おしまい